



北と南の縄文文化



本日の日程

- 13:30 開会のあいさつ 所長 井ノ上 秀文
- 13:35 南の発掘調査報告
「見帰遺跡」 武安 雅之 文化財主事
「中津野遺跡」 光永 誠 文化財主事
「報告書等の成果」 永濱 功治 文化財主事
- 14:30 北の発掘調査報告
「宮城県気仙沼市における震災復興支援」 . . . 西園 勝彦
(気仙沼市への派遣職員)
- 15:15 北と南の縄文文化
「北の縄文文化」 平 美典
(岩手県への派遣職員)
「南の縄文文化」 東 和幸 調査第一係長
質疑応答 堂込 秀人 調査課長
- 16:30 閉会

資料集目次

南の発掘調査	
見帰遺跡	1
中津野遺跡	3
報告書等の成果	5
北の発掘調査	
宮城県気仙沼市における震災復興支援	7
北の縄文文化	15
南の縄文文化	29
用語集	37
遺跡位置図	39

ごあいさつ

本日は、「かごしま遺跡フォーラム2013 ～北と南の縄文文化～」に、ようこそおいで下さいました。

このフォーラムは昨年度、鹿児島県立埋蔵文化財センター設立20周年を記念して開催したのが始まりで、今回が2回目ということになります。今回は「北と南の縄文文化」というタイトルで、北と南の文化の多様性について発表いたします。

先の東日本大震災から2年半が経過し、様々な復興が進んでいく中、鹿児島県立埋蔵文化財センターは発掘調査関連業務で2名の職員を派遣し、復興支援に取り組んでいます。発表ではまず「南の発掘調査」としまして、昨年度から今年度上半期までの鹿児島県内の発掘調査成果の一部を報告いたします。次に「北の発掘調査」としまして、復興支援に関わる発掘調査の現状について報告いたします。そして最後に北と南の遺跡を比較し、それぞれの遺跡の共通性と多様性について発表いたします。

北と南の異なる自然環境の中、先人たちはどのように考え、工夫し、生きてきたのかを会場の皆さま方とともに考え、未来に生きるヒントを得る機会になればと願っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

平成 25 年 10 月 26 日

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 井 ノ 上 秀 文

みかえり
見帰遺跡

武安 雅之（調査課第一調査係）

- 1 所在地 志布志市志布志町志布志
- 2 地形 標高約 70m の台地上
- 3 調査期間 平成 25 年 4 月～平成 25 年 9 月
- 4 層位 表 1
- 5 主な成果 表 2
- 6 概要

見帰遺跡は、志布志市街地から北におよそ 3km、標高約 70m の台地上に位置しています。丘陵地を土地改良で平坦にしているため、場所によっては年代の古い層位が表土のすぐ下に位置する場合があります。また、西側を安楽川が流れており、急峻な谷地形も近くにありま

す。調査の結果、旧石器時代細石刃文化期、縄文時代早期から後期の遺構・遺物が出土しました。旧石器時代細石刃文化期（約 15,000 年前）はハンマーストーン、敲石などが、縄文時代は早期（約 8,000 年前）の遺物として石坂式・下剥峯式土器などの土器をはじめ、石鏃、磨石、石皿等の石器と、遺構として集石 1 基が、前期から中期（5,500～4,500 年前）の遺構として落し穴状遺構 2 基を検出し、後期（約 3,500 年前）の遺構は溝状遺構 1 条を検出し、遺物は磨消縄文・丸尾式・中岳Ⅱ式・西平式土器などの土器が出土しました。



図 1 見帰遺跡の位置

表 1 見帰遺跡で見られる地層

層位	色調	遺物	層厚
I 層	表土		50 cm
II 層	黒色土	縄文後期	15 cm
III 層	黒褐色土(御池火山灰?含む)		15 cm
IVa 層	黒色土	縄文前中期	10 cm
IVb 層	軽石混じり黒色土(池田降下軽石含む)		10 cm
V 層	茶褐色土		5 cm
VIa 層	黄橙色腐植土(アカホヤ腐食)		15 cm
VIb 層	黄橙色砂質土		10 cm
VIc 層	橙色パミス(アカホヤ火山灰)		10 cm
VIIa 層	黒色土	縄文早期	20 cm
VIIb 層	黒褐色硬質土	縄文早期	20 cm
VIIIa 層	明黄褐色土(薩摩火山灰)		30 cm
VIIIb 層	茶褐色硬質土		10 cm
IX 層	褐色粘質土	旧石器時代	20 cm
X 層	暗褐色粘質土	旧石器時代	15 cm
XIa 層	黄褐色土		20 cm
XIb 層	黄褐色土(黒色硬質ブロック土含む)		15 cm
XII 層	黄褐色軽石混じり土(2次シラス)		—

表 2 主な遺構と遺物

時代	検出遺構	出土遺物
旧石器時代		剥片, 打面調整剥片, ハンマーストーン, 敲石, 磨石
縄文時代早期	土坑 10 基, 集石 1 基	石坂式土器, 下剥峯式土器, 石鏃, 磨石, 石皿
縄文時代前～中期	落し穴遺構 2 基, 土坑 1 基	
縄文時代後期	溝状遺構 1 条	磨消縄文土器, 丸尾式土器, 中岳Ⅱ式土器, 西平式土器
時期不明	溝状遺構 1 条, 土坑 2 基	

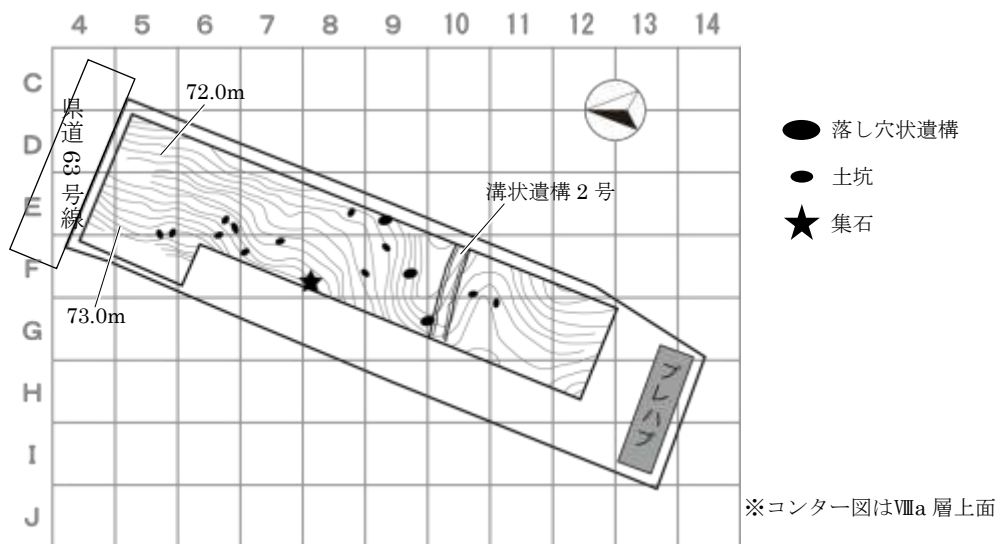


図2 遺構配置図



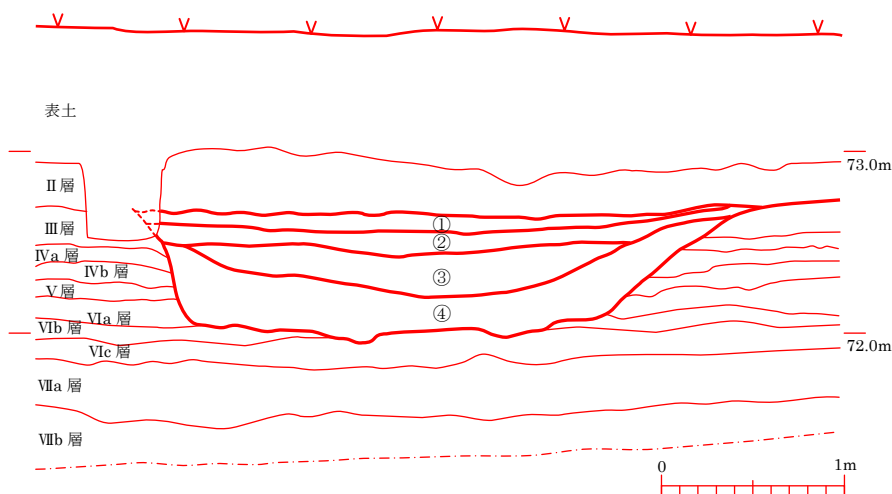
集石 1 号



落とし穴状遺構 1 号



溝状遺構 2 号



調査区西側土層断面における溝状遺構 2 号の埋土の状況

図3 遺構

御池火山灰の量が①から④にかけて次第に多くなっている。また、④では、①～③に比べて粒子が大きくなっている。
③・④では池田降下軽石と思われる粒子を含んでおり、その量は④の方が多い。
④では、両側の斜面に沿って御池火山灰が多量に堆積しており、上部からの流れ込みによるものと思われる。

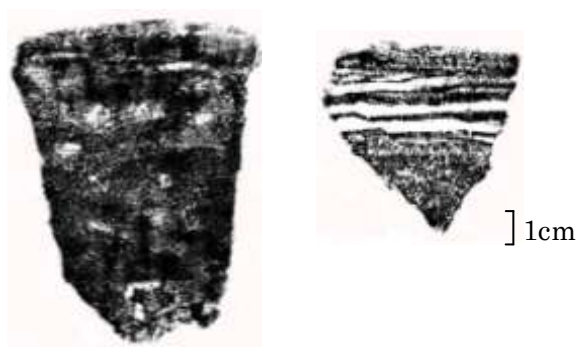


図4 溝状遺構 2 号内遺物

なかつの
中津野遺跡

光永 誠（調査課第二調査係）

- 1 所在地 南さつま市中津野（図1）
- 2 地形 標高約9mの段丘面
- 3 調査期間 平成25年6月～平成25年10月
- 4 層位 表1
- 5 主な成果 表2
- 6 概要

中津野遺跡は東シナ海に注ぐ方之瀬川の支流である境川が形成した沖積低地、河岸段丘、そして台地上に立地しています。本年度は段丘面の一部を調査しました。

調査の結果、縄文時代後期（約4000年前）から近世（約300年前）にかけての遺構・遺物が発見され、縄文時代より今日にかけて長い間人々が生活していたことが分かりました。弥生時代（2500年前）では、復元すれば1～2個体になると思われる土器が入った土坑が発見され、今後復元するのが楽しみです。また、中津野遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭（1700年前）の「中津野式土器」の標式遺跡でもあります。今回の調査地区からは、その中津野式土器が大量に入った弥生時代末から古墳時代初期の溝も発見されました。近世では、カマド跡が2基発見されました。そのうち1基は周りを掘立柱建物跡が囲っており、カマド小屋のような施設であったと予想されます。さらにその南側には母屋と考えられる大型の掘立柱建物跡があり、大変興味深いです。



図1 中津野遺跡の位置

表1 中津野遺跡で見られる地層

層	色調	時代	層厚
I	表土		
II a	黒褐色土	近世～弥生前期	20 cm
II b	黒色土		25 cm
III a	茶褐色土	弥生前期～縄文後期	10 cm
III b	黄橙色土	縄文後期	20 cm
III c	黄橙色火山灰土		ブロック
IV	褐色土		10 cm

表2 主な遺構と遺物

時代・年代	遺構	遺物
縄文時代晩期～ 縄文時代後期		指宿式土器，市来式土器，晩期の土器 石皿，磨石，石鏃，フレイク，チップ
弥生時代前期	土坑 6基	高橋式土器，入来式土器 石皿，磨石，石鏃，打製石器，磨製石斧，石包丁
弥生末～ 古墳時代前期	溝状遺構 1条	中津野式土器
古代・中世	溝状遺構 1条 大型土坑 1基	青磁，白磁，土師器
近世	掘立柱建物 6軒 カマド跡 2基 溝状遺構 5条 大型土坑 2基	薩摩焼

7 中津野式土器について

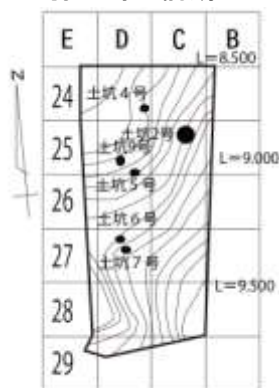
中津野遺跡は中津野式土器の標式遺跡です。中津野式土器は、主に弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて作られた土器です。昭和 25 (1950) 年に宅地に隣接する一段高い畑地を 1 m 余り掘り下げたところ、一角から多量の土器が出土しました。地主は南日本新聞社に調査を依頼、同社から委嘱された河口貞徳氏が調査を行ったところ多くの完形土器を発見しました。

壺形土器は大型の楕円形胴部に外へ開いた口縁部がつき、胴部に一条の絡縄凸帯を巡らした丸底の土器です。甕形土器は、胴部から頸部へ締め、口縁部へ外反する、中空の脚台のつく器形です。



8 発掘速報

(1) 弥生時代前期



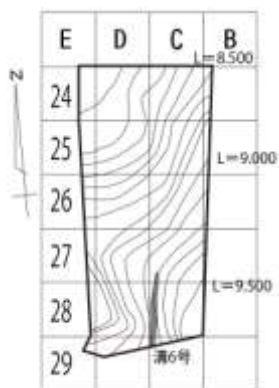
コンターはⅢa層上面



土坑 4 号

長径 190 cm
短径 140 cm

(2) 弥生末～古墳時代前期



コンターはⅢa層上面



溝 6 号

長さ 18m 以上
幅 110 cm
深さ 70 cm

(3) 近世



(1 グリッド 10m×10m)



掘立柱建物
跡 1 号

カマド 1 号

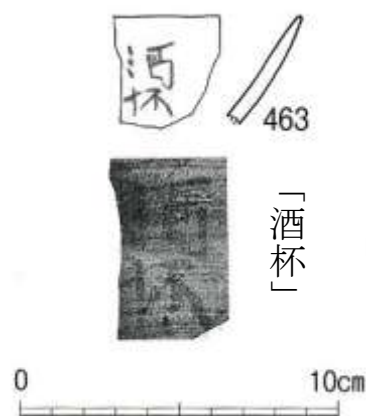
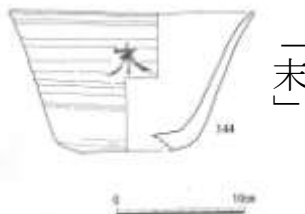
掘立柱建物
跡 2 号

報告書の成果

永濱 功治（南の縄文調査室）

かわかみじょうあと 川上城跡（鹿児島市川上町）

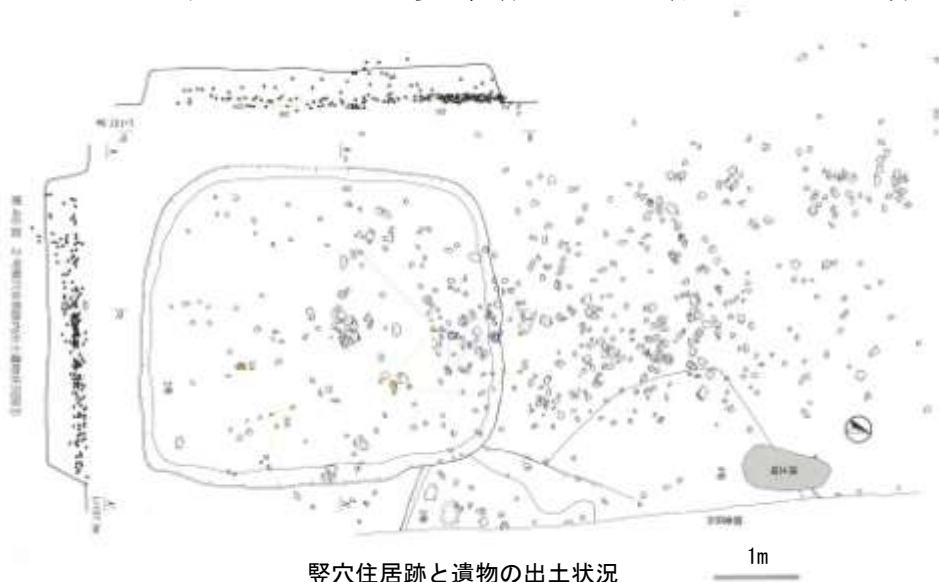
川上城跡は鹿児島市街地から北西へ約7kmの吉田インターチェンジ近くの遺跡です。標高約150mに位置し、中世の山城として使われる前（古代）の遺構や遺物が多く出土しました。掘立柱建物跡3棟や畠の畝の痕跡、炉跡とよばれる火を使った跡も見つかりました。遺物は平安時代前半（9世紀中頃）の土師器と呼ばれる素焼きの土器が多く見つかり、中には土器の表面に墨で文字を書いた「墨書土器」と呼ばれるものも見つかりました。その中には「下田」と書かれた墨書土器もありました。川上町の隣は下田町で、古くからその地名で呼ばれていたことが分かります。また、河川周辺の低い土地には現在も田園地帯が広がっています。他には越州窯青磁と呼ばれる中国産の磁器や緑釉陶器と呼ばれる貴重な遺物も出土しました。



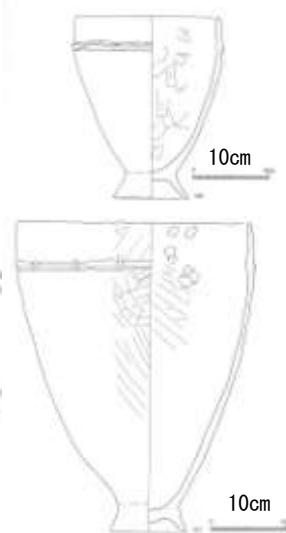
いなりやま ちんじゅやま 稲荷山遺跡・鎮守山遺跡（鹿屋市）

稲荷山遺跡では縄文時代晩期（2,800年前）及び古墳時代（5～6世紀）の竪穴住居跡が見つかりました。古墳時代の竪穴住居跡は5軒のうち3軒は部分的に重なって見つかり、同じ場所で建て替えられていったことが分かりました。

鎮守山遺跡では古墳時代の竪穴住居跡が20軒見つかりました。稲荷山遺跡同様、重なって見つかったものも多く、繰り返し建て替えていたことが分かります。



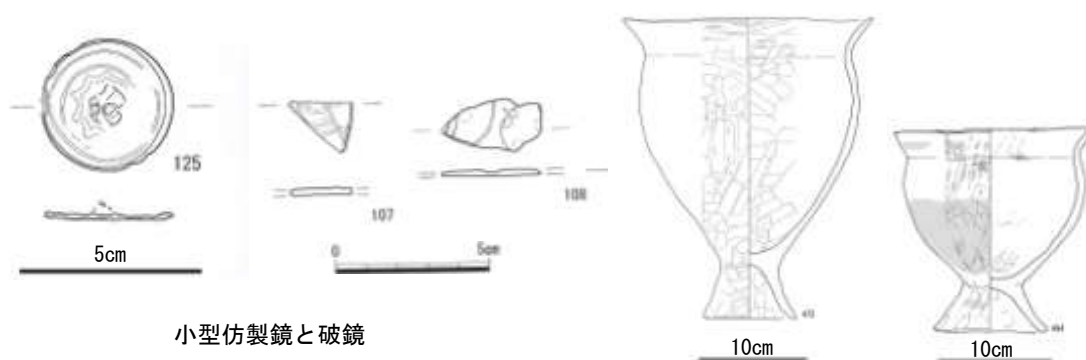
竪穴住居跡と遺物の出土状況



成川式土器（古墳時代）

しばはら
芝原遺跡（南さつま市金峰町）

芝原遺跡は万之瀬川中流の標高約4mの自然堤防上の遺跡です。縄文時代から近世までの遺構や遺物が多数見つかりました。縄文時代の調査では、中期（約4000年前）の堅穴状遺構と漁労具の一種である鋸歯状尖頭器が見つかりました。弥生時代終末から古墳時代初頭（3世紀頃）では、日本製の「小型仿製鏡」とよばれる鏡と中国製の鏡を分割した「破鏡」が発見されました。このような鏡の所有者はこの地域の支配者層の人々であったと思われます。また、完全な形に近い土器が集中して発見され、水辺の祭祀を行った場所ではないかと考えられます。古代では、「酒井」「福」「宅」などと書かれた墨書土器が多数発見されました。中世では大量の輸入陶磁器や国内産陶器が発見され、博多や坊津と並んで万之瀬川下流域は海外の貿易拠点であったことが分かりました。

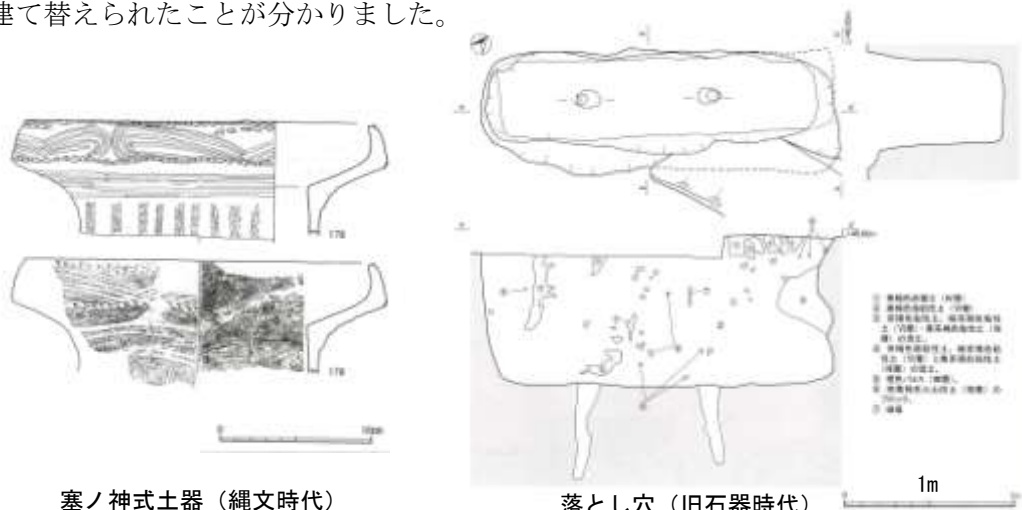


小型仿製鏡と破鏡

中津野式土器（古墳時代）

山口遺跡（薩摩川内市都原）

山口遺跡は川内川支流木場谷川、都川に挟まれた台地上にあります。西回り自動車道都インターチェンジ近くの遺跡です。主に旧石器時代と中世の遺物が多数発見されました。旧石器時代（約15,000年前）の遺物としては細石刃を製作した跡や落とし穴、礫群などが見つかりました。縄文時代早期（約7,500年前）の土器で、口が「く」の字に折れ曲がった特殊な塞ノ神式土器も発見されました。中世では掘立柱建物跡を中心に墓跡、土坑が4つのエリアに集中して見つかり、切り合いの関係から数時期にわたって建て替えられたことが分かりました。



塞ノ神式土器（縄文時代）

落とし穴（旧石器時代）

東日本大震災復興支援報告

けせんぬまし
宮城県気仙沼市における震災復興支援

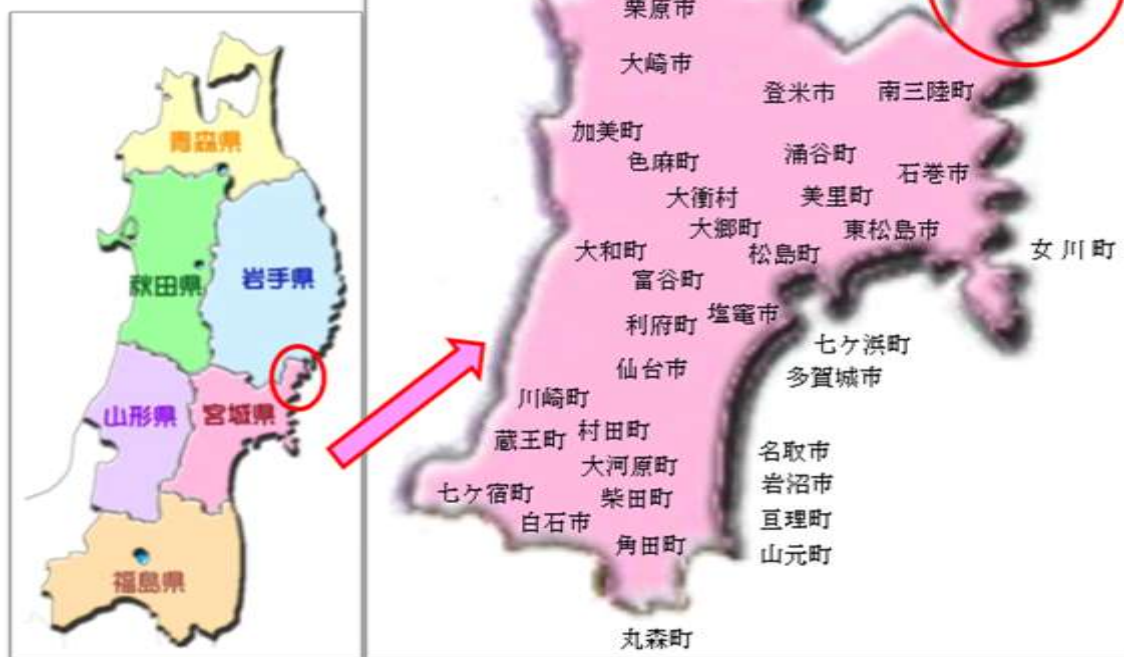
気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係

主査 西園 勝彦

- 1 勤務地 気仙沼市魚市場前1-1
気仙沼市教育委員会生涯学習課文化振興係
- 2 派遣理由 東日本大震災復興支援（埋蔵文化財調査業務）
- 3 派遣期間 平成25年1月～現在に至る
- 4 主な業務 個人住宅等建設に伴う発掘調査ほか
- 5 職員体制 気仙沼市職員 2名
気仙沼市再任用職員 1名
気仙沼市任期付職員 1名
気仙沼市支援職員 2名
（西園、松山市文化スポーツ振興財団職員 1名：10・11・12月）
宮城県任期付職員 1名
宮城県支援職員 5名程度
※ アンダーラインが震災復興のための増員
太字が宮城県外からの支援職員

気仙沼市の位置

宮城県の東北端で、
岩手県へ突き出ている部分



気仙沼市での埋蔵文化財の復興支援の内容

- ★ 住宅を地震や津波で失った方が個人で高台に住宅再建する際の発掘調査
おもな仕事
- ★ 防災集団移転（高台移転）、災害公営住宅建設のための発掘調査
応援でしている仕事
- ★ 農地復旧（除塩作業）などのための発掘調査
現在 なし
- ★ 地震や津波で失なわれた店舗、工場、アパートなどを高台に再建・新築する際の発掘調査
着任前にはありました
- ★ 公共施設再建、移転のための発掘調査
警察署・市立病院
- ★ 三陸自動車道（復興道路）のための発掘調査
宮城県主体

グレーに塗っているところが、これまでに携わった仕事です。

★印のところが件数・日数の多い主な仕事です

厳冬期の調査



極寒の日は、地面が10cmほど凍っています



平成25年1月から10月に調査した遺跡

日付	遺跡名	起因	時代	遺構	遺物	内容
平成25年1月17日	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	土器・石器	B
平成25年2月6～8日	旭岡 あさひおか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年2月7日	星谷 ほしや	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代前期	なし	土器	D
平成25年2月14～19日	三島古墳群 みしまこふんぐん	個人住宅建設	古墳時代	古墳 新発見	なし	C
平成25年2月21日	南最知城跡 みなみさいちじょうあと	個人住宅建設	中世城館	なし	なし	
平成25年3月7～8日	磯草貝塚 いそくさいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	縄文土器	B
平成25年3月7～9日	南最知貝塚 みなみさいちかいづか	個人住宅建設 私道工事立会	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年3月18～26日	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代前期	貯蔵穴	土器・石器	A
平成25年4月3日	石兜 いしかぶと	市立病院建設	江戸時代	金探掘溝	なし	仙台藩
平成25年4月9～10日	圃の沢 はたのさわ	個人住宅建設	古代 9世紀	溝	土師器・須恵器	C
平成25年4月12日	古館貝塚 こだてかいづか	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代 前期・中世	なし	なし	
平成25年4月15日	内の脇貝塚 ないのわきかいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	なし	
平成25年4月17～22日	田柄貝塚 たがらかいづか	個人住宅建設	縄文時代前期	なし	縄文土器	D
平成25年5月23～24日	堀合館跡 ほりあいたてあと	個人住宅建設	中世城館	なし	なし	
平成25年5月31日	河原崎 かわらさき	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年6月17～21日	南最知城跡 みなみさいちじょうあと	中学校運動場建設 (仮設グラウンド*)	中世城館	なし	なし	
平成25年6月24日	高谷 たかや	個人住宅建設 浄化槽工事立会	縄文時代	なし	なし	
平成25年6月25～28日	三島古墳群 みしまこふんぐん	個人住宅建設	古墳時代	古墳	なし	D
平成25年7月9日	野々下 ののした	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年7月30日	本吉平貝 もとよしひらがい	会館移設	縄文時代	なし	なし	B
平成25年7月31日	月立台 つきだてだい	個人住宅建設	縄文時代	なし	なし	
平成25年8月20日	小屋館跡 こやだてあと	神社参道補修	中世城館	なし	なし	
平成25年8月5日～10月	高谷 たかや	個人住宅建設	縄文時代	貯蔵穴	土器・石器	A

※ A: 完全に発掘調査を終わらせる B: 盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない C: 一部のみ完全に発掘調査＋盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない D: 位置を変えて遺跡を保護して発掘調査を行わない

発掘調査・整理事業応援					
平成25年1月～平成25年6月 調査終了	波怒葉館跡 はぬきだてあと	防災集団移転	縄文時代前期・中世城館	貝塚	土器・石器・土偶・櫛・釣針・マクロ解体痕跡骨

個人住宅の発掘調査

- ・ 個人住宅を建設しようとする土地が遺跡である時に発掘調査を行います
- ・ 短期間の調査から長期に及ぶ発掘調査があります
- ・ これまでに約 20 件の調査に行きました
- ・ 4 月からの問い合わせ件数 300 超
- ・ このほかにも発掘調査が必要かチェックしに行ったりもします



GPSで位置と標高を計測
※ 地盤沈下をしているため周りにある三角点を利用せず新たに測っています

気仙沼市での埋蔵文化財の復興支援 個人住宅建設



完全に発掘調査を終わらせる



高谷遺跡(たかやいせき)

縄文時代の集落跡
貯蔵穴(ちようぞうけつ)
がたくさん見つかりま
した



盛土をして遺跡を保護して発掘調査を行わない



磯草貝塚(いそくさいづか)

縄文時代の貝塚
新しい貝塚が見つかりました



一部のみ完全に調査 + 盛土して遺跡を保護して発掘調査を行わない



三島古墳群(みしまこふんぐん)

古墳時代～奈良時代
これまで知られていなかった
古墳が見つかりました



高谷遺跡発掘調査

6軒の住宅を建てるために発掘調査をしています。縄文時代の貯蔵穴が、約40基見つかりました。どれも上部が無くなって下半分だけが見つかりましたが、理科の実験で使うフラスコのような形をしていると考えられるものです。

写真に重機が写っています。

発掘調査は、工事と発掘調査を同時に行えるように計画を立てて、遺構や遺物が出土しないところと発掘調査が終了したところから住宅を建てるための工事を行っています。



災害公営住宅・防災集団移転

は ぬ きだてあと
波怒棄館跡

防災集団移転 応援でしている仕事
6月に発掘調査を終了しました



だいのしたたてあと・だいのしたかいづか
台の下館跡・台の下貝塚

災害公営住宅・防災集団移転
現在発掘調査中 少量の応援のみ



東北での埋蔵文化財復興支援



復興道路建設のための発掘調査

■三陸沿岸自動車道

▲常磐自動車道

★防災集団移転のための発掘調査

※個人住宅のための発掘調査

●被災文化財の修復のための発掘調査



発掘された日本列島展2013

特集 東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護より

石垣の解体修理の状況（宮城県仙台市史跡仙台城跡）

文化庁編 「発掘された日本列島展 2013」

特集 東日本大震災の復興と埋蔵文化財保護より

気仙沼市における震災復興支援(埋蔵文化財調査業務)で気付いたこと

違い

① 気候・風土・文化

当然のことですが、これらは日本全国様々です。

② 発掘道具

一部の発掘道具の違いを感じました。基本は変わらないので、おそらくどの県でもその土地や出土物にあった道具、言い換えれば地質・土質・掘る時代や遺構にあった道具を選択・洗練して使用しているためにそうなっているのかなと考えます。同じ道具でも名前が違うことがあります。

③ 土

土質も違います。気仙沼市では、これまで鹿児島県内で扱ってきたような厚い火山灰、サンゴの砂丘はありません。また、貝塚に触る機会を得ましたが、鹿児島では自分で調査したことはありません。

④ 調査法、遺構・遺物

これも基本は変わらないはずですが、なにか違和感を覚えました。今はほとんどありませんが、個人住宅等の発掘調査をした経験の不足からかもしれません。

出土遺物の時代が分かりません。特に縄文土器。

⑤ 体制

これまで、発掘調査をしたことがない者同士が多数名集まって仕事をしています。

初めての経験です。

市役所というところでの仕事も初めてです。

⑥ 年度が替わると⑤を繰り返します。

「違い」はまだまだあるかとは思いますが、ここで記したことは、ストレスとなっているはずですが、はずなのですが、肩こりがするくらいで、楽しく毎日過ごしています。

④～⑥は作業員さん達も感じ、ストレスとなっているのではないのでしょうか。

また、受け入れる側にもストレスがあるはずですが。気仙沼市では、震災後様々な文化財の被災からの復旧も取扱い、埋文もあり非常に忙しく働いています。その他の県、市町村さんも同じではないでしょうか？

目標・課題

復興支援で発掘調査した遺跡の記録類は、報告書作成などの時、展示の時、図録作成の時などに自分が担当するとは限らず、遠く離れたところにいるはずである。

そのため、協議事項・内容、調査の流れや方法の取捨選択、複数枚にわたる図面のトレース、図面注記、写真の注記、各種台帳作成などに加えて小さなことでも記録を残しておくことが後々につながるのではないだろうか？

以後復興支援にあたる方に迷惑にならないようにメモを残し、整理整頓し、何か一つでも「まち」のためにできないかということを考えて、実践できるように頑張っていきたい。

私たちの東北復興支援の仕事は、一日でも早く、一軒・1本・1か所 etc でも早い復興・再建のためのお手伝いに加えて、「埋蔵文化財のために遅れた」と言われないように頑張るということと、まちの過去を探る仕事であるということ念頭に頑張りたい。

復興は始まったばかりで本格的に始まるのはこれからです

復興支援報告 ～埋文だより 59 号より～

2011年3月11日、東日本を襲った巨大津波とそのすさまじい惨状^{あまじょう}については、皆さんも記憶に新しいことと思います。私は現在、岩手県教育委員会で東日本大震災^{あへんじ}の復興に伴う調査支援にあたっています。このような支援は阪神淡路大震災の際に初めて実施され、今回も全国から20名の職員が東北被災3県（岩手10名、宮城9名、福島1名）へ4月から派遣^{はけん}されています。派遣職員は10月にさらに増員され、来年度以降も全国から派遣される予定になっています。

私が派遣された岩手県では復興班が組織され、地元職員とともに調査にあたっています。主な業務としては、復興道路関係の分布調査や試験調査^{しけんさうさ}、高台移転等に伴う試験調査や本調査、さらに市町村支援などがあります。

復興道路関係の分布調査では、これまでに約120kmを踏査しました。クマを警戒しながら三陸^{さんりく}の起伏のある山中を調べて回るのは大変ですが、緑豊かなブナの森や時々姿を現すシカやカモシカ、リスの姿が疲れを癒してくれます。

試験調査^{しけんさうさ}では壊滅した集落で調査を行ったこともあり、全員で黙祷^{もくとう}をしてからガレキが残る家の基礎横部分を掘ったこともありました。

被災されて仮設住宅に暮らす方々と一緒に作業することもあります。皆さん大変な被害にあ



被災地での試験

いながらも、将来へ向けて力強く歩んでいこうとされています。また派遣された我々を逆に気遣ってくださるなど、東北の方々の忍耐力と人情にふれると、頭の下がる思いがします。

震災復興に伴う調査なので、いろいろと大変な面もあります。岩手県は本州最大の面積をもち四国くらいの広さがあるため、被災地まで行くのに滞在先から100km以上あります。被災地で宿泊先を確保するのも一苦勞です。

また、調査に必要な重機や作業員が確保できないこともあります。しかし、岩手県の職員や全国から集まった派遣職員と知り合えたり、東北の豊かな自然・歴史・文化などを知ることができるのは貴重な経験です。



分布調査中

震災から1年半がたちました。少しずつ仮設の店舗等が増えてきているものの、被災地には未だにガレキがうず高く積み、倒壊した堤防、基礎だけの家々など荒涼とした風景が広がり、仮設住宅では今でも4万人の方々が生活しています。復興へ向けてまだまだ多くの課題がありますが、震災前よりも安心して暮らせる日が一日でも早く訪れることを願いながら、日々調査に励んでいます。

（平成24年度派遣職員 平 美典）

復興支援報告

～埋文だより 61号より～

私は、今年の1月から東日本大震災の復興支援のため、宮城県気仙沼市教育委員会で発掘調査などを実施しています。

このような支援は、平成24年4月から東北の被災3県（岩手県、宮城県、福島県）で実施されていますが、今年の4月からは全国から、さらに多くの職員が派遣されています。派遣職員は全国の都道府県や市町村、企業の職員、埋蔵文化財関係の仕事を退職された方など様々です。

気仙沼市では、私を含めて4名の職員を増員し、宮城県教育委員会に全国各地から支援に来ている埋蔵文化財の職員の応援もいただきながら埋蔵文化財の発掘調査を行っています。

私の主な業務は、震災で住宅を失った方が住宅を再建しようとする場所が遺跡であった時に行う発掘調査です。その他、防災集団移転（高台移転）の場所が遺跡であった時に行う発掘調査の支援もしています。震災復興支援の発掘調査では、地元の職員や全国から集まった職員と知り合え、お互いの経験や知識、現在の発掘調査現場について話し合いを行うことで、調査方法などの勉強にもなり、東北地方の歴史・文化・自然などを知ることでもできる貴重な体験です。

発掘調査は、気仙沼市在住の方と作業を行っています。中には勤め先が被災して失業した方や仮設住宅に暮らす方もいらっしゃいます。皆さん大変な被害からの復興を願いながら作業をいただいています。さらに、私たち応援に来ている職員の健康や生活も気遣ってください。東北の方々の辛抱強く、温かい心に触れるたびにこちらが励まされています。

厳冬の1月に気仙沼市に来てから5カ月が経ちます。雪が積もり、土も凍る気温の中での発掘調査からのスタートでした。東北の冬は厳し

く、初めての経験も多かったです。4月にはフキ／トウが芽吹いて春の訪れを知らせてくれ、5月の連休には桜が満開となりました。



積雪の中での発掘調査

大きな地震と巨大津波が襲ってから2年余りが過ぎました。被災地に広がっていたガレキのほとんどが撤去されましたが、大変な被害を受けた地域では建物などの基礎がそのまま残っていて、まだまだ多くの被災された方が仮設住宅での生活を送り、港や鉄道、道路、工場なども完全な復旧を果たしていません。



発掘調査現場周辺の津波被害の状況

漁業で有名な気仙沼の町が活気を取り戻すには、もう少し時間が必要なようです。これから暑い夏、紅葉の秋、寒い冬と東北の季節や自然を感じながら、一日でも早い復興を願って気仙沼での仕事に励みたいと思います。

（派遣職員 西園 勝彦）

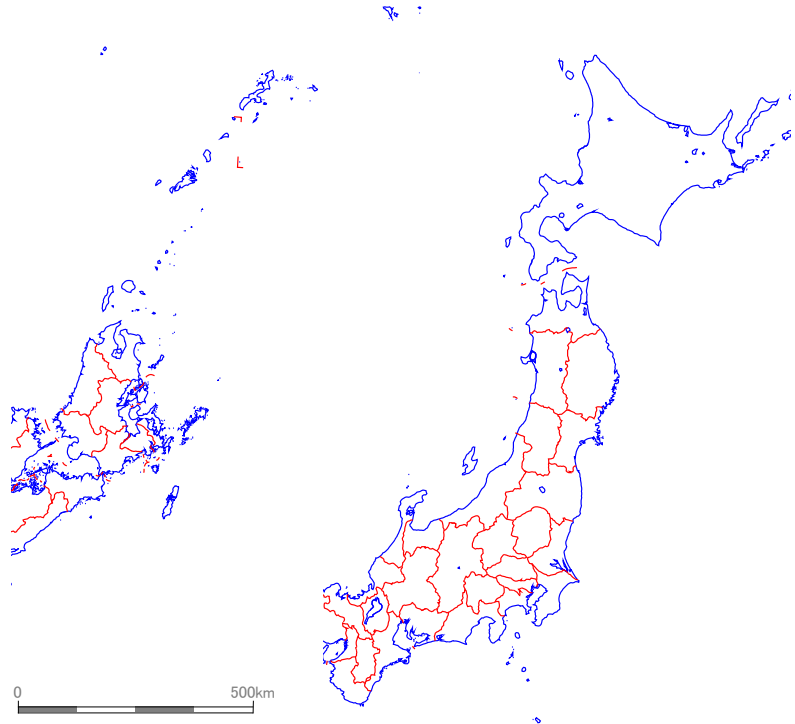
※県立埋蔵文化財センターでは、東日本大震災復興調査支援に2名の専門職員を派遣しています。

南の縄文文化

東 和幸(調査課第一調査係長)

1 はじめに

九州にいと、東北地方の大きさは実感できません。県数が九州本土7県で、東北地方6県であることから、面積も同じぐらいだろうと錯覚してしまうのです。鹿児島と青森は二つの半島からなっている点でよく似ており、お互いに触覚を出し合って、南北にアンテナを張っているのだと説明されます。しかし地図上で九州島をひっくり返して東北地方と並べてみると(右図)、その大きさの差がよく分かります。



地元の特徴を知るには、地元だけを詳しく調べても明らかにすることはできません。他の地域と比較することによって違いが明らかになり、地元の特徴がみえてきます。その比較対象は、北部九州よりも遠方の東北地方と比較する方が、違いが鮮明になってくることは明白です。また、東西による違いよりも南北による違いの方が、緯度による気象条件が異なり、生活様式そのものの差異が表れます。

今回は、東北地方の縄文文化と比較することによって、南九州の縄文文化の特質を^{えぐ}り出してみたいと思います。

2 縄文人の装い

風雨に^{さら}晒され乾いた台地上では、有機質は腐ってしまい現在まで残ることはほとんどありません。水漬けにされたか炭の状態でなければ、植物質や動物質の材料でつくられた道具は残らないのです。幸いなことに、縄文人が土器をつくる際に偶然敷いた布や敷物の圧痕があるため、当時の生活を垣間見ることができます。



編布編みによる衣服(想像図)

(1) 布

南九州では縄文時代晩期から弥生時代前期（3000年～2300年前）にかけて、組織痕土器と呼ばれる中華鍋形をした土器が見られます。土器を型どりしてつくる際、型から粘土をはずしやすいうように布状のものを敷いたのです。網目と編布が多くみられ、平織りや編組がわずかにあります。編布は、横糸を二本の縦糸でモジリながら編み上げていく手法です。縦糸の幅を変えることによってデザインにもなりますし、隙間の調節にもなります。尾関清子先生（2012『縄文の命』）の研究によると、鹿児島県の編布事例は突出して多く、縦糸の間隔が広いことも指摘されています。温暖湿潤な南九州では、風通しの良い服が合っていたようです。

(2) 装飾品

「縄文人は、ブレスレット・ネックレス・ペンダント・ピアス・ヘアピンなどをしていた」と言えば、驚く現代人も多いと思います。現在のおしゃれ感覚と違って、縄文人は自分の身体に邪悪なものが入ってこないように魔除けとして装身具を身に付けていたようです。

貝製の腕輪は、いちき串木野市市来貝塚や鹿児島市上福元町草野貝塚などで知られています。タマキガイやマルサルボウガイが素材として使われています。垂飾品は牙製や石製のものがあり、サメ歯を象った石製品も伊佐市大牟田遺跡で出土しています。獰猛な動物の一部を身に着けることによって、その威力を借りたのかもしれませんが、さすがに熊の骨は出土していません。縄文時代後期後半（3200年前）には、緑色の石材でつくる勾玉や管玉が流行し、南さつま市上加世田遺跡や出水市大坪遺跡で多く出土しています。全国に広まった北陸地方のヒスイほどの規模ではありませんが、九州山地で採れたと思われる緑色をした石材が西日本に流通しています。耳飾りは縄文時代早期後半（7500年前）から普遍的に見られ、縄文時代前期（5000年前）まで玦状耳飾りが存在します。玦状耳飾りは中国大陆にも似たようなものがあり、関連性を探ることが課題です。髪飾りとしては、垂水市終原貝塚や日置市吹上町黒川洞穴出土品などが知られています。

3 縄文人の食生活

(1) 植物食

ア 植物残滓

食料とした植物で最も多いのが、ドングリ類です。鹿児島県の木の実はいちいガシなど、水さらしだけでアク抜きができるものです。また、最新の研究では土器の凹みにシリコーンを流し込んで元の形を調べるモデリング方法により、さつま町水天向遺跡の縄文時代後期終末（約3200年前）の土器に靱が付いていたことがわかっています。

イ 採掘痕

楕円形の土坑の一端がさらに深く掘られた例が、縄文時代以降でもみられます。これは、ヤマイモやクズの根を掘り出した痕ではないかと考えられています。秋になり葉を落として根に栄養分を溜め込んだヤマイモやクズは、いつの時代にも魅力的だったことでしょう。



ウ 道具

後期中半から弥生時代中期（3500～2100 年前）に多い石器として、扁平な打製石器があります。1つの遺跡で、100点超が出土することもあります。一方の端寄りに挟りがありますので、木の柄に縛り付けてズレないようにしていたと考えられます。土を掘ったり、均したりする手鋤のような道具が想定されます。大量の石製土掘具が必要なほどの土木工事跡はみられませんので、日常的に土を耕すなどしていたと思われます。今後、土器の種子圧痕や開聞岳の灰ゴラ直下の耕作痕で証明していく必要があります。

(2) 動物食

貝塚や洞穴で出土する動物骨の中で大半を占めるのが、イノシシやシカです。食べるだけでなく、毛皮や脂肪分、それに骨角牙など捨てる場所はないほど、利活用したと思われます。その他にも珍しい動物として、ジュゴンやオオヤマネコの骨があります。また、魚や貝の種類も非常に多く、これは海岸線が発達していることや鹿児島湾内が深くて外洋性の魚が入ってくることが理由です。海と山が非常に近い鹿児島は、一年中、自然の豊かさに恵まれていたことに感謝しなければなりません。

(3) 調理施設

燻製料理をつくる連穴土坑や石蒸し焼き料理のための集石遺構など、食に対して南九州の縄文人は食欲でした。これらは野外にある施設であり、集落の人々みんなが集まって開放的に食べていた光景が想像されます。



燻製料理

(4) 生活用具

ア 狩猟具

食事をするには、まず食料となる素材を得なければなりません。動物の場合は、落とし穴や植物繊維を使った罠猟の他、弓矢を使った狩猟を行っていました。矢に付ける石鏃は、基部が凹んだ形がほとんどで、東北地方のように有茎のものはありません。石鏃の装着方法が違っていたようです。東北地方では天然のアスファルトを接着剤としていましたが、鹿児島での装着方法はまだわかっていません。

もう一つ南九州における石鏃の特徴として、磨いて作ることが早くから行われていました。「磨製石鏃が発達するのは弥生時代になってから」というのが教科書的ですが、種子島の三角山遺跡例などのように草創期（13400 年前）からみられます。貝

殻を磨いてつくった貝鏃^{かいぞく}がモチーフになっていると指摘する研究者もいます。ここにも海との関わりがありそうです。

イ 漁労具

魚をとるのに網漁や釣りが行われていたことは、石の錘^{おもり}や角製の釣り針^{つのせい}が出土していることから明らかです。網の資料としては、土器にスタンプとして残っています。網の目が5mmから37mmのものまでありますので、大きな魚からメダカまで掬^{すく}えるような網を準備していたようです。

ウ 加工具

動物の解体には、石匙^{いしきじ}が使われていますが、骨を割ったりするのには石斧^{せきふ}も用いたと想像されます。東北地方の石匙が縦長であるのに対し、鹿児島県の石匙は横長が主体となる点が異なります。理由は分かっていませんが、動物の皮下脂肪の厚さと関係があるとしたら興味深いです。

植物質の加工には、石皿^{いしざら}と磨石類^{すりいし}が使われました。早期前半（9500 年前）の石礮^{せきふ}状になった磨石類と台形状をした石皿は特徴的です。また、後期前半（4000 年前）に装飾性のある石皿が流行するのは、磨消縄文^{すりけし}を伴った東側の文化の影響を受けたとも考えられます。

エ 煮沸具

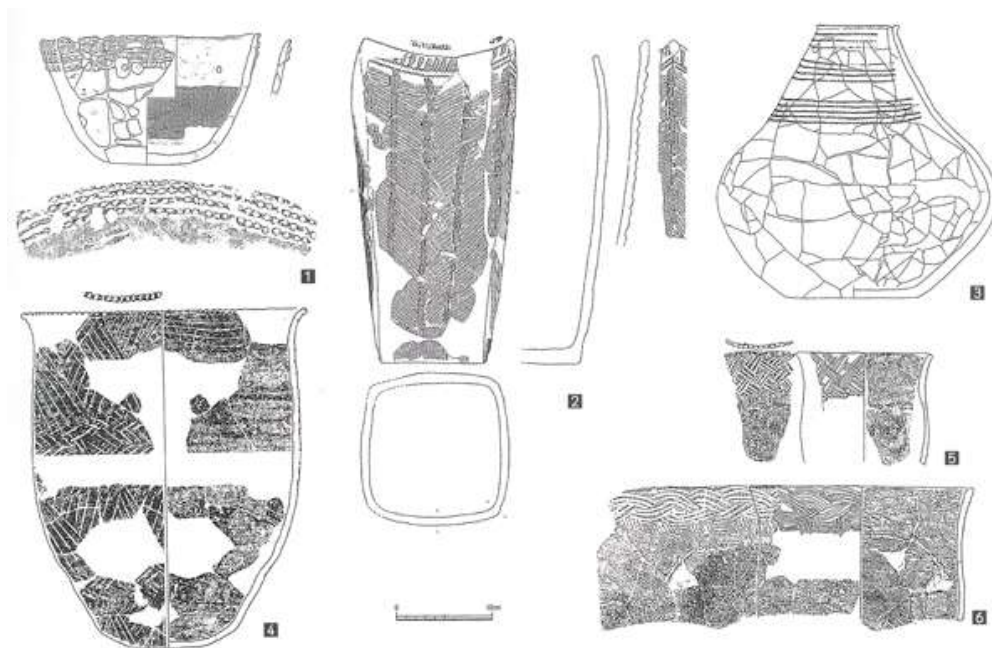
煮沸具としては縄文土器が主体となります。縄文土器が発明されたことによって、①食べ物を軟らかく煮ることができ、幼児や老人が食べやすくなった。②腐りかけたものや、アクの強いものも食べられるようになった。③他の食材と混ぜることによって多彩な味が生まれた。など、旧石器時代と比べて食生活が大きく変わったと考えられます。また、可塑性^{かそせい}のある土器は、各地域や各時期によって形や文様などの違いが表れます。

(ア) 土器の形

関東以北では、古い時代には深鉢形土器の底部が尖底^{せんてい}もしくは丸底であり、新しくなるにつれて平底の土器が定着しました。また、晩期（3000 年前）になると壺形土器や台付き鉢形土器などが加わります。一方、鹿児島では初めから平底の土器であり、早期終末から中期初頭（7400 年前～4800 年前）にかけて尖底や丸底となります。さらに、壺形土器は上野原遺跡例のように早期後半（7500 年前）にみられることが特徴です。後期（4000 年前）になると台付き皿形土器が、晩期（3000 年前）になると中華鍋形の土器が流行します。もう一つ忘れてならないのが、早期前半（9500）の、上からみて四角形やレモン形の土器です。それぞれの時期に、なぜ違った形の土器が出現するのか追究することも課題の一つです。

(イ) 土器の文様

縄文土器と言われながら、鹿児島の土器は草創期（13400 年前）から晩期終末（2700 年前）まで、貝殻文が主流を占めます。縄を転がしたり（縄文）、刻んだ小さな棒を転がして（押しがた^{おしがた}文）文様を付ける全国的にみられる方法とは異なります。しかし、縄文時代を通して3回ほど縄文の波が押し寄せてきます。1回目が早期中半から早期後



南九州の土器

- 1 隆帯文土器（鹿児島県中種子町三角山遺跡） 2 前平式土器（鹿児島県鹿児島市前原遺跡）
3 塞ノ神式土器（鹿児島県霧島市城ヶ尾遺跡） 4 曾畑式土器（鹿児島県鹿児島市仁田尾中遺跡）
5, 6 嘉徳式土器（鹿児島県奄美市下山田Ⅱ遺跡）

半（8000～7500 年前）にかけての、押型文土器や平^{ひら}椀式土器と塞ノ神^{せのかみ}A 式土器の頃です。紐^{ひも}を巻き付けた軸を転がして文様を付ける、撚糸文^{よりいともん}もみられます。2 回目が中期前半（4800 年前）の船元式土器が入ってくる頃です。3 回目が、磨消縄文が入ってくる後期前半から後期中半（4200～3500 年前）の頃です。後期前半には巻き貝を転がした文様もみられます。これら 3 回入ってくる縄文土器の共通点は、渦巻き文^{うずまき}を描いていることです。渦巻き文が、ワラビの新芽を象徴するのか、それとも脱皮を繰り返す蛇を象徴するのかは分かりませんが、北の縄文土器の源流にあることは確かです。

では、鹿児島の土器の文様は何が基本となっているかと言え、植物繊維を編んだり組んだりした籠^{かご}が見えてきます。曾畑式土器（5500 年前）はもとより、前平式土器（9500 年前）や嘉徳式土器（3500 年前）も籠をモチーフとした文様として理解できます。

鹿児島に 3 回入ってくる縄文の波ですが、それぞれ塞ノ神 B 式土器（7400 年前）、春日式土器（4500 年前）、岩崎式土器（4200 年前）など貝殻を使った文様に発展させています。外から入ってくる波を拒絶することなく、受け入れながらも独自のものに変えていく南九州の縄文人に、学ぶべきところが多くありそうです。

4 縄文人の住

(1) 住居

ア 竪穴住居^{たてあなじゅうきょ}

鹿児島で竪穴住居が発見される例は、早期前半（11000～9500 年前）が主体であり、他の時期はそれほど多くありません。早期前半から後半（8000～7500 年前）にかけては多くの遺跡で集石はあるのですが、竪穴住居はほとんど見つかりません。現在の我々の発掘技術が未熟なのか、それとも実際地面に残るような構造の住居ではなかったのか、両面を考えておかなければなりません。もし、竪穴住居がみられない時期があるとするれば、気候との関係をみていく必要があります。現在でも「住まいは夏を旨^{むね}とす

べし」というように、温暖湿潤の鹿児島で半地下式の竪穴住居は不向きだったかもしれません。

なお、東北地方にみられる長さ 20m を越す大型住居を南の視点で見ると、雪深い冬を 1 軒 1 軒で過ごすよりも、数家族で暮らした方が燃料の節約にもなって良かったのではないのでしょうか。昼も夜も雪に閉ざされた、北の縄文人の知恵ではないかと思います。

イ 洞穴

鹿児島県本土は火山活動による溶結凝灰岩の浸食洞があり、黒川洞穴（日置市吹上町）・^{ひきやま}日本山洞穴（始良市加治木町）・^{くわの}口輪野洞穴（霧島市国分）・^{なかだけ}中岳洞穴（曾於市末吉町）・^{かたの}片野洞穴（志布志市志布志町）などが発掘調査されています。種子島の阿獄洞穴には、弥生時代中期（2100 年前）の人々が暮らしていました。奄美諸島は隆起珊瑚からできており、鍾乳洞や岩陰を利用した^{おもなわ}面縄貝塚（徳之島伊仙町）・^{なかふ}中甫洞穴（沖永良部島知名町）などが生活の場となりました。

自然の洞穴や岩陰は、雨露や台風などをしのぐには良好な場所です。しかし、湿気が高いので定住には不向きです。台風常襲地帯の南九州にとっては、自然の洞穴や岩陰が緊急避難場所としても有効だったと考えられます。

(2) 集落

ア 集落構造

縄文時代草創期（13400 年前）には、鹿児島市^{そうじやま}掃除山遺跡の例のように 2 軒の竪穴住居跡と舟形配石炉、それに煙道付き炉穴がセットでみられます。縄文時代早期前半（10000 年前）には、竪穴住居が「ハ」の字形に並ぶ傾向があり、連穴土坑と集石を伴います。縄文時代後期（4800 年前～3200 年前）も同様ですが、集落内には実用的な施設ばかりがみられ、モニュメントのようなものは無かったようです。

イ 道

早期前半（9500 年前）の道跡は、霧島市上野原遺跡や日置市伊集院町^{ながきこびら}永迫平遺跡および^{かみやまじやま}上山路山遺跡で知られています。これらは、自然の小さな谷を利用したものであり、雨の時は水も流れていたようです。一方、日置市吹上町^{たていしがはら}建石ヶ原遺跡では台地上に幅 260 cm で深さ 30 cm の凹みが 130m にわたり続き、道跡であると想定されています。底面に開聞岳の灰ゴラが堆積していることから、晩期終末ごろ（2900 年前）の道跡と考えられます。また、志布志市志布志町^{みかえり}見帰遺跡でも後期末（3300 年前）の道跡と考えられる大きな溝状遺構が検出されています。海に面した鹿児島では、丸木船による移動も多かったと想定されます。



丸木舟造り(想像図)

(3) 道具

草創期（13400 年前）に、沖縄本島や種子屋久を含めた南九州では、丸ノミ形をした石斧が出土します。これ

は、丸木船をつくるための道具とされています。内陸部でも見つかったので、大木のある山で丸木船を加工したり、河川での利用もあったと考えられます。貝殻文土器の源流は、海に関係ある人々がもたらしたものであることを証明するきっかけが丸ノミ形石斧にあるのかもしれません。

5 その他

(1) 埋葬

人骨の残りが良くない理由もあり、墓として捉えられた例はほとんどありません。縄文時代後期後半（3400 年前）になって現れる埋設土器^{まいせつ}についても、墓としての確証は得られていません。東北地方のように、祖先墓を中心に長い年月をかけて集落が円形につくられることもありません。縄文時代に限りませんが、南九州での埋葬方法は多様であり、謎に包まれています。

(2) 人骨

鹿児島県の土地は火山灰土壌であり酸性なので、人骨の残りは良くありません。市来貝塚や出水貝塚で出土しているぐらいです。身長がやや低く、抜歯などもないようです。ちなみに、現在の 17 歳男子の平均身長を比較すると、鹿児島は全国 47 都道府県中 43 位であり、縄文時代から続く伝統的なことなのかもしれません。なお、上位 5 位には青森県、秋田県、山形県の東北勢が入っています。

(3) 火山との関わり

霧島の御池^{みいけ}、始良の米丸マール、桜島、開聞岳周辺、硫黄島付近^{きかい}の鬼界カルデラなど、縄文時代だけでもそれぞれの火山が何度か大爆発を繰り返しました。当時の人々にとって火山は大変迷惑だったかもしれませんが、黒曜石^{こくようせき}や鉄石英^{てつせきえい}など石器をつくるための石材は火山の恵みによるものです。また、発掘調査をする我々にとっても火山灰のお陰で、①遺構や遺物をパックしており、残りの状態が良好である。②火山灰の色が異なるので、火山灰に掘り込まれた遺構を検出しやすい。③土器の年代前後関係の把握や遠くの遺跡との新旧関係を明らかにしやすい。など有り難い面が多いのも確かです。現在、全国にある 1 割の火山が集中している鹿児島で、歴史や文化を火山なしで語ることはできません。

(4) 呪術具

東北地方には多種多様で多量の呪術具がありますが、鹿児島では限られた種類しか無く数も多くありません。土偶に至っては、上野原遺跡（7500 年前）、南さつま市金峰町芝原・渡畑遺跡（4500 年前）、上加世田遺跡（3200 年前）の 3 点しかありません。ただし、後期終末（3200 年前）の軽石製岩偶はかなりの流行をみせ、弥生時代中期までつながる軽石製岩偶の源流ともなっています。石剣や石刀類も後期終末（3200 年前）に十数例みられ、大崎町永吉天神段遺跡では 5500 年前の西日本最古の石剣が話題となりました。

南の視点から見ると、東北地方に呪術的な遺物や装飾性の高い土器が多いのは、四季にメリハリがあり、深い雪の中での時間がたっぷりあるからではないかと考えられます。自然の恵みに感謝する気持ちがより強く、長い冬を乗り越えるための知恵と工夫が多いことや、住居内で時間をかけた念入りな作業ができるからではないかと思われる。

6 おわりに

平成 19 年に、福島県立博物館と鹿児島県歴史資料センター黎明館が合同で、「樹と竹」という民具を主体とした企画特別展を開催しました。（『樹と竹 ー列島の文化・北から南からー』2007 年 鹿児島県歴史資料センター黎明館・福島県立博物館）重厚で装飾性に優れた北の民具に対して、南の民具は軽くて実用性を重視したものであることが浮き彫りになりました。百年経たなければ加工できない北の樹に対して、3 年もあれば材料に育つ南の竹に象徴されるように、気候の違いが生活文化に大きく影響を与えていることがわかります。これは縄文時代にも当てはまることで、北の装飾性の高い縄文土器や多彩で豊富な呪術具^{じゆじゆつぐ}、大きくて長期仕様の住居などに対し、南の土器や遺構は即物的な印象を与えます。

ここ 30 年間における、岩手県盛岡市の年平均気温と年間降水量が 10.2℃と 1266 mmであるのに対し、鹿児島市は 18.57℃と 2265 mmです。この差は縄文時代もさほど変わらなかったと推察されますので、それぞれの植生や動物相を活かしながら、それぞれの気象現象に合わせた暮らし方があったと考えられます。それは、材質や動力が異なるだけで、少なからず現在にもつながっていることでしょう。突発的な自然災害への備えや現代社会の便利さの功罪を知るためにも、たまには携帯電話も電気水道も使わず、縄文人の気持ちに近づく一時も必要なのかもしれません。



前原遺跡 縄文土器

用語集

^{いぶつ}
遺物・・・昔の人々が使った道具のことです。土器や石器、金属器など。

^{いこう}
遺構・・・昔の人々が残した生活の跡のことです。家の跡（^{たてあなじゅうきよ}堅穴住居）や調理場のあと（^{しゅうせき}集石）など。

^{たてあなじゅうきよあと}
堅穴住居跡・・・昔の人々が住んだ家の跡のことで、地面に穴を掘り、柱を立て、^{あし}葦などの植物で覆った住居の跡のことです。覆いは残っていないことが多く、色の違う土の範囲が見つかり、堅穴住居が発見されることが多いです。



^{しゅうせき}
集石・・・こぶし大の石を多数集めて加熱し、熱くなった石の上に肉などを置き、調理したと考えられている遺構のことです。



^{どこう}
土坑・・・地面に掘られた人為的な穴のことです。何のために掘られたか分からないものも多いです。

^{ほったてばしらたてものあと}
掘立柱建物跡・・・地面に柱を立てて作った建物の跡のことです。建物自体は残っていないことが多いので、柱の痕跡（色の違う丸い土の部分）が等間隔に見つかりと掘立柱建物跡の可能性がります。



^{せきぞく}
石鏃・・・石で作られた道具で、^{やじり}矢尻とも書きます。矢の先にひもなどで固定して使います。



〇〇式土器・・・時代や時期ごとに作られた土器の種類（^{けいしき}型式）を表します。最初に出土した遺跡の名前が付き、その型式の土器が出土したら、遺跡の大まかな時代が分かります。（例：^{なりかわ}成川式土器→指宿市山川の成川遺跡で出土した土器で、古墳時代に多く作られました。）

^{ろあと}
炉跡・・・火を使ったあとのことです。土が赤くなっていたり、炭が残っていたりすると、炉跡だった可能性があります。

カマド跡・・・昔の人がご飯を炊いたりする道具をカマドといいます。そのカマドの跡の事です。

^{おとしあな}
落とし穴・・・獲物を捕るために掘った穴のことです。穴の底に、^{くい}杭などを立てて、落ちた後、動けないようにしたとも言われます。

みぞじょういこう

溝状遺構・・・溝のように線状に土を掘られた形跡があるものを溝状遺構といいます。道や側溝、何かの境界線だった可能性がある遺構です。

はじき

土師器・・・古墳時代から平安時代にかけて作られた赤褐色の素焼きの土器を土師器といいます。

せいじ

青磁・・・陶磁器の一種で、釉薬に含まれる鉄分が還元炎焼成（窯の中に空気を入れないように焼く方法）によって青く発色した焼きものです。ときに黄色や灰青色になることもありますが、青磁といいます。

はくじ

白磁・・・灰白もしくは、白色の素地に透明もしくは乳白色、白色の釉薬をかけて高温で焼き上げた焼きものです。

さいせきじん

細石刃・・・石器のなかでも、細石器と呼ばれる非常に小さい石器の一種です。幅約 2mm～1cm, 長さ約 2～5cm の大きさの石刃を細石刃といいます。そして、それを動物の骨や木に埋め込んで槍のように使っていたと言われています。



さいせきかく

細石核・・・細石刃を作るために削った石の残った部分を細石核といいます。細石核をみれば、どのように細石刃を作ったのかが分かります。そして、この作り方は、地方や集団によって異なります。



すりいし

磨石・・・石皿と一緒に使うことの多い丸い石で、木の実を敲いたり、粉を挽いたりする時に使う石です。要するに、杵のようなものです。



いしざら

石皿・・・石の皿とありますが、磨石と一緒に使うことの多い臼の役割をする皿状の石です。

たたきいし

敲石・・・木の実をつぶしたり、石器などを作る時に使う石です。

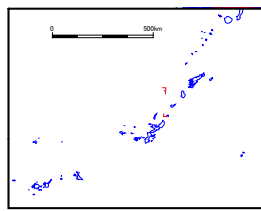


時代区分と年代値



半年表の間隔は便宜上、調整してあります。

遺跡位置図



今回紹介した主な遺跡

- : 縄文時代の主な遺跡
- : 南の発掘調査で紹介した遺跡

